

聖藏洞穴探検の一日

羽柴宗

九月廿四日 秋分の日、いわゆる彼岸の中日、佐伯史談会日本五村青年会にちよ
聖藏洞穴を探つた。

午前八時すぎ、改新でバスを降りた一行は、先ず公民館に立よ(一)て、枝角其
会の諸方氏、文化財調査委員の高橋氏(お三人共会員)から、予備知識を賜
して貰へた。

佩楠山の奇巖、上腰越といふ部落ちかみ出たという、数十年前の奥か
石(実物)を以てしめとする、聖藏の人骨、骨器、やじり、井、土で捨集る多数
のやじり、稚木川原で発見した石斧を、次々に展示しての、まるで地質学
考古学の講座で、史談会としては、且つない学問の断をまつた。

水時半、え、一行は急傾斜の山脈をよじ登つて月下洞穴に入つた。入口
近く、白とんぼを並べた三米ほど、高さ三米、傍にたが、洞内は割合に平坦で、七十
ほど、奥は深かつた。懐中電燈で照し出す洞穴内は、怪可ともわめて、ほじめ
はこわく、なつかさぐ、馴れて面白く、みんぞんではさかいて、製片と骨
を採集した。数千年の骨を秘めた人骨の、出た位置も確認した。

一体、聖藏古くは、どうしてこんな所に住んでいたか。高、二百米ほど、こ
の洞穴に、どうして古人は生活したか。三十件余の人骨は、何を意味するの
か。全てミステリーの世界である。

洞穴を出て山を下り、一応宇津々新落の中心部までの戻る。そこには約
二十基ばかりの一字二石塔や、庚申塔が群つてゐる。宇津々の、いれ、庚申の江
戸時代に於ける習俗研究の鍵となるものであると思つた。

一行は車に分乗して三股の高橋家に向つた。お茶を頂いた。昼食に
高橋夫人、栗の石垣餅と振舞つて下さる。まことに珍らしい。そいでお
いしい季節の馳走であつた。

お座敷で高橋氏の集蔵にある陶器を次々に見せて貰ひながら、陶
器のお話を承る。これより、勉強、そいで、序に、何点かの書画を見
ることが出来る。

帰途、四人ばかりは、風戸の地獄谷と、端端穴を見た。後者は大
きくドームをもつ石灰洞で、本日望外の探検であつた。